

オーストリア・フォラールベルク州における刺繍・レース工業の発展：20世紀初めから1970年代初めまでに焦点を当てて

山本，健兒
九州大学：名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/7419078>

出版情報：経済学研究. 92 (2), pp.1-33, 2026-03-31. Society of Political Economy, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



オーストリア・フォラールベルク州における 刺繍・レース工業の発展

— 20世紀初めから1970年代初めまでに焦点を当てて —

山 本 健 児

1. はじめに
2. 20世紀前半期フォラールベルクの刺繍・レース工業の状況
 - 2.1. 1880年から1948年までの刺繍機械台数の変化と1950年頃の状況
 - 2.2. 東スイス依存の加工貿易
 - 2.3. 独自の輸出市場開拓
 - 2.4. レース生産の開始
3. 第2次世界大戦後1970年代初めまでの刺繍・レース工業の成長
 - 3.1. 1940年代末頃の状況に関する刺繍工業連合事務局長の認識
 - 3.2. ファブリカントとローンシュティッカーの連帯
 - 3.3. 1960年代までの輸出動向
 - 3.4. フォラールベルク州内での刺繍生産の地理的分布
 - 3.5. 1950年頃のレース (Klöpelspitze) 生産の状況
 - 3.6. 1950年代半ば頃の有力刺繍企業の概要
 - 3.7. フォラールベルク製刺繍の輸出先とその変化
4. おわりに

注
文献
英文要旨

1. はじめに

本稿の目的は、山本 (2025) の続編として、1970年代初めまでのオーストリアのフォラールベルク州における刺繍・レース工業¹⁾の発展過程を描くことである。

この前稿では、同地における農家女性たちによる手作業での刺繍生産が東スイスのザンクトガレン輸出商の下請として18世紀半ば頃に誕生

したこと、しかし機械を用いての刺繍量産に取り組む企業が1870年代以降徐々に増え、その中には独自の輸出市場を開拓したのがあることを明らかにした。そうした企業家たちの出自は、ザンクトガレンの刺繍輸出商や工場所有兼経営者 (ファブリカント Fabrikant) と刺繍に携わる農家女性たちとの間を往復して材料・製品の運搬と賃加工代金支払いの仲介をしていたフェルガー (Fergger) や各村の名望家層だったことも

明らかにした。また、ザンクトガレンの輸出商・ファブリカントの下請として機械での賃刺繍生産に従事していた家内工業者（ローンシュティッカー Lohnsticker）たちとフォラルベルクで誕生していたファブリカントとが結集して、刺繍生産技術修得や後継者育成のための帝国刺繍専門学校の設定を19世紀末に実現したことなども明らかにした。

本稿では、前稿で提示しなかった統計データや地元研究者による信頼できる論文などに基づいて、20世紀初めから1970年代初めまでのフォラルベルクにおける刺繍・レース工業の発展過程を描く。

2. 20世紀前半期フォラルベルクの刺繍・レース工業の状況

2.1. 1880年から1948年までの刺繍機械台数の変化と1950年頃の状況

表1はフォラルベルクに設置されていた刺繍機械の種類別台数が1880年から1948年の間にどのように変化したかをみたものである。ここから完全な手作業での刺繍職人3人分の生産性をもつ鎖編刺繍機械も、30~50人分の生産性を持つ手動刺繍機械²⁾も、設置台数のピークが1900年頃であり、その後減少したことが分かる。ただしこの2種類の機械で生産する商品は同じではない。鎖編刺繍機械で生産する商品 (kettenstichstickerei チェーンステッチ刺繍) の品質は手動刺繍機械のそれ (Plattstichstickerei 平編刺繍) に比べて劣ると言われている (黒澤2002: 328)³⁾。

手動刺繍機械よりも高い生産性を挙げるのできるシフリ刺繍機械にはパントグラフ (Pantograph) とモーターで駆動されるアウト

マーテン (Automaten) とがある。より早く開発されたのはパントグラフであり、これの設置台数のピークは1910年頃でその後減少したのに対して、労働生産性がより高いアウトマーテンの設置台数は1929年まで漸増した。労働生産性の低い機械は、より生産性の高い機械が開発されると次第に使われなくなるという傾向があった。しかし完全に駆逐されるわけではなく、世界大恐慌が起きた1929年以降にあっても4種類の機械が同時に使われていた。その理由は機械によって生産できる刺繍の用途・文様・精巧度などに違いがあったからである (Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 185-186)。

刺繍機械を生産する企業はフォラルベルクになかった。それを生産したのはスイスのカントン・トゥールガウ (Thurgau) に立地するザウラー (Saurer) 社か、またはドイツのザクセン王国 (第1次世界大戦後はザクセン州) フォークトランド (Vogtland) の都市プラウエン (Plauen) に立地するフォークトランド機械工場 (株) (Vogtländische Maschinenfabrik AG (VOMAG)) などだったので、フォラルベルクの刺繍生産企業はスイスあるいはザクセンのいずれかから機械を購入した。シフリ刺繍機械だけについてみるとパントグラフはスイス製が、アウトマーテンはフォークトランド製がより多かった (表2)。

鎖編刺繍機械を用いたのは19世紀末から20世紀初めともなれば主としてブレーゲンツァーヴァルト (Bregenzerwald) という山間地の農家女性たちだった。これに対して、手動刺繍機械やシフリ刺繍機械を用いたのは主としてラインタル (Rheintal) 平坦部の人たちで⁴⁾、その操作者の多くは男性であり、ローンシュティッ

表1 フォラルベルク州で設置されていた刺繍織機械台数の変化

年	鎖編刺繍機械	手動刺繍機械	シフリ機械		パンチング機械	シフリ機械の中での比率		スイスの手動刺繍機械
			パントグラフ	自動機		パントグラフ	自動機	
1880	1,232	1,404						13,373
1890	2,806	3,141						18,499
1900	3,646	4,032	365			100.0		14,934
1910	3,293	3,456	1,359	43	3	96.9	3.1	15,671
1914			1,198	408	48	74.6	25.4	
1921		998	911	407	48	69.1	30.9	7,959
1927		513	445	711	82	38.5	61.5	
1929	約1,000	約300	298	846	96	26.0	74.0	3,206
1932		約200	194	730	98	21.0	79.0	2,130
1934			141	581		19.5	80.5	
1940		約80	121	539		18.3	81.7	800
1947		83	102	539	89	15.9	84.1	
1948	500/700	83	86	483	76	15.1	84.9	

出所：Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 185)

原資料は Dr. W. Mühlwerth (1941) Probleme der Vorarlberger Stickereiindustrie, S.9, 13, 35、及び部分的に Prof. Franz Winsauer によると記されている。

注1) 1921年の数値は12月1日時点、1927年は7月5日時点、1929年は5月2日時点、1932年は1月1日時点、1934年は3月31日時点、1947年は1月1日時点、1948年は7月1日時点。

2) スイスに設置されていた手動刺繍機械台数は Linder (1956: 20) による。その原資料は Statistisches Jahrbuch der Schweiz vom Jahre 1936 と Reg. Rat Prof. Winsauer とによると記されている。

表2 フォラルベルクに設置されている刺繍機械の種類別台数とその生産地

年	パントグラフ		自動機		パンチング機	
	ドイツザクセン	スイストゥールガウ	ドイツザクセン	スイストゥールガウ	ドイツザクセン	スイストゥールガウ
1914	493	648	367	68	39	9
1926	98	347	599	112	61	21
1929	45	253	652	194	66	30
1932	27	167	578	152	65	33
1950	8	78	388	95	48	28

出所：Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 186)

注：原資料は Prof. F. Winsauer による。1914年のパントグラフはほかに30台あったと注記されている。

カーの場合には補助的な仕事にその家族の女性がついた。これの大半は一家に1台、多くてもせいぜい2台で、農業も副業として営んでいた。ローンシュティッカーの刺繍生産は家族総出による仕事だった。つまり刺繍生産の機械化は進展したが工場制工業企業と言えるほどに大規模化した企業は少なく、大半は家族だけで生産する零細な家内工業企業だった (Linder 1956:

43-45)。このことは表3からはっきりと見て取ることができる。1台しか設置していない業者は1950年で300、2台設置業者が39、それ以上の台数を設置している企業は少なく、11台以上設置している企業はわずか6社しかなかった。また、フォラルベルク全体でのシフリ刺繍機械の台数が1914年の1606台から1950年の569台に大きく減少した。事業者数も770から359に半

表3 フォラルベルクにおける設置されている刺繍機械台数別にみた刺繍生産企業の数

設置台数	企業数				シフリ機械の台数			
	1914年	1928年	1932年	1950年	1914年	1928年	1932年	1950年
1台	543	441	474	300	543	441	474	300
2台	117	88	63	39	234	176	126	78
3台	33	20	9	2	99	60	27	6
4～5台	19	13	22	4	85	59	170	60
6～10台	33	23		8	280	190		18
11台以上	25	12	8	6	365	230	127	107
合計	770	597	576	359	1606	1156	924	569

出所：Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 187)

注：原資料は Prof. F. Winsauer によると記されている。

減以下となった。(Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 187)

ローンシュティッカーはファブリカントや輸出商から材料を支給されて加工のみをし、その代価として賃金を受け取る。そのほとんどは東スイスのファブリカントからの委託で刺繍生産に従事した。ただしフォラルベルクでもファブリカントが誕生するとこの委託で刺繍生産するローンシュティッカーも出てきたが、1920年頃までその数と生産量は前者に比べて圧倒的に少なかった。後述するように、フォラルベルクの刺繍生産の大部分が東スイスに依存する加工貿易だったからである。

ファブリカントと鎖編刺繍機を用いて生産する農家女性たちとの間には必ず自営業者としてのフェルガーが介在して刺繍材料と完成品を輸送し、加工賃の支払いを中継ぎした。手動刺繍機械やシフリ刺繍機械を駆使するローンシュティッカーとファブリカントの間にもフェルガーが介在したが、その両者が直接取引するようになったのでフェルガーは少なくなった(Linder 1956: 43)。Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 187)にもそのことが記されており、1950年時点でフェルガーは鎖編刺繍機械での刺繍職人にとってのみ活動し

ているに過ぎず、19名しかいなかったとのことである。Winsauer (1965: 21)⁵⁾によれば、1960年代まで鎖編刺繍機械を用いる農家女性がブレーゲンツァーヴァルトにいたので、フェルガーも存在していた。また、ファブリカントの従業員の中にフェルガーの役割をする者もいたことについては、Heinzle (2018: 33)に依拠して山本 (2025: 35) で指摘しておいた。

ところで、20世紀初めには新しい比較的大きな刺繍企業も出現していた。ルステナウで1968年に開催されたフォラルベルク機械刺繍100年祭に際して刊行された小冊子に掲載された「シフリ機械による大躍進」と題する文章には、60年前頃、即ち1910年頃までに成立していた比較的大きな企業が12社言及されている。また、最初の独立デザイナーの名前も言及されている。(Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie 1968: 7)⁶⁾。これらの刺繍企業の所在地は明記されていないが文脈からしてルステナウであろう。この南に隣接するホーエネムス(Hohenems)にも大きな刺繍企業が当時4社あった。この4社は1950年代半ば時点でも存在していたし(Eugen Ruß Verlag 1956)、それ以前に別の1社があったことも上述の記念小冊子に記されている。アルタハ(Altach)、ランクヴァイル(Rankweil)、

ゲッツイス (Götzis)、ザットアインス (Satteins) にも比較的大きなファブリカントが各1社誕生した。ドルンビルン (Dornbirn) に立地する企業も2社言及されており、その内の1社が1950年代半ばに存在していたことも Eugen Ruß Verlag (1956) から分かる。

以上のような実態だったので、東スイスの輸出商・ファブリカントに依存せずに自ら販売市場を開拓するファブリカントがフォラールベルクでも第1次世界大戦以前から出てきたことは確かである。

2.2. 東スイス依存の加工貿易

しかし、ローンシュティッカーのほとんどは東スイス企業の下請だった。この下請は、国境をなすアルペンライン川を挟んで、フォラールベルク州と東スイスとの間での貿易ということになる。Linder (1956: 98-99) は、第1次世界大戦までフォラールベルク製刺繍のほとんどがスイスに輸出されており、フォラールベルク独自の販売市場は実質的になかったも同然と評した。ただし、その品質は高く、しかも賃金水準が東スイスと比べて低いので低コスト生産であり、輸出の仕組みと宣伝が功を奏すればフォラールベルク独自の輸出市場を開拓できるので、第1次世界大戦後に漸次独自の市場開拓がなされるようになったとのことである。そもそもスイス製刺繍として世界市場で販売されている商品であっても、フォラールベルク製の場合があったという。フォラールベルク製刺繍の品質の高さの証拠として、1937年にパリで開催された世界博覧会でグランプリの栄誉に輝いたことを Linder (1954: 99) は指摘している。しかし、前述したようにフォラールベルクでもファブリカントが第1次世界大戦勃発以前にいくつか生ま

れていたことは確かなので、わずかとはいえ東スイスに依存しない独自市場の開拓が始まっていた。これについては山本 (2025: 23-24) でも指摘しておいた。

この点はともかくとして、フォラールベルクからみれば東スイスとの刺繍貿易は、輸入した材料に加工を施して直ちに輸入元に輸出するという意味での再輸出加工貿易 (aktiver Veredelungsverkehr) であり、東スイスからみれば輸出した材料が加工されて製品になりこれを輸入するという意味での再輸入加工貿易 (passiver Veredelungsverkehr) だった。それゆえ関税減免のための交渉がフォラールベルク州政府と東スイスのザンクトガレン商業理事会 (Kaufmännische Direktorium in St. Gallen、即ちザンクトガレン・アッペンツェル商工会議所の前身) との間でなされた (Linder 1956: 78-89)⁷⁾。貿易に関する交渉が両国家政府によってではなく、州政府と1カントンの商工会議所の前身機関との間でなされたのである。

要するに、刺繍商品は19世紀末から20世紀初めにかけてフォラールベルクの輸出において大きな比重を占めたが、その生産の大半はザンクトガレンを中心とする東スイスの刺繍工業の下請としてなされる再輸出加工貿易に依存したのであり、これが1920年頃まで続いていた。このことは表4と図1に見て取ることができる。

2.3. 独自の輸出市場開拓

表4から、1920年時点でのフォラールベルク製刺繍の最重要の輸出先は依然としてスイスだったが、当時の世界最富裕国だったイギリスや、欧州内でイギリスの経済力に迫りつつあったドイツへの輸出も、スイスに比べて圧倒的に少ないとはいえあったことが分かる。またオー

表4 フォローバルベルク製綿刺繍の主要輸先 1920年(重量のみ)、1928年、1938年

輸先国等の名称	重量 q : 100 kg		輸出額 単位: 1000		1kg 当り単価		対全世界比率 %		1928年から1938年への増減重量		増減率	
	1920年	1928年	1938年	1928年	1938年	1928年 S	1938年 RM	1920年	1928年	1938年		
スイス	9.884	13.600	1.625	43,478	1,770	32	10.9	91.0	52.1	26.2	-11975	-88
英領インド		4.357	2,314	11,062	1,940	25	8.4		16.7	37.3	-2043	-47
オランダ領インド (インドネシア)		3,760	120	9,457	105	25	8.8		14.4	1.9	-3640	-97
イギリス	280	1,469	505	4,391	684	30	13.5	2.6	5.6	8.1	-964	-66
英領アフリカ		310	581	798	288	26	5.0		1.2	9.4	271	87
ドイツ	169	294		1,272	1	43		1.6	1.1		-294	-100
ユーゴスラビア	53	236	8	807	13	34	16.3	0.5	0.9	0.1	-228	-97
オランダ	58	216	476	629	460	29	9.7	0.5	0.8	7.7	260	120
ハンガリー	79	181	58	668	73	37	12.6	0.7	0.7	0.9	-123	-68
ルーマニア	85	164	10	603	13	37	13.0	0.8	0.6	0.2	-154	-94
アメリカ合衆国		161	357	552	668	34	18.7		0.6	5.8	196	122
スペイン	51	147		729	43	50		0.5	0.6		-147	-100
中国		136		432		32			0.5		-136	-100
フランス	12	92	4	283	8	31	20.0	0.1	0.4	0.1	-88	-96
ベルギー領アフリカ		92	26	258	40	28	15.4		0.4	0.4	-66	-72
トリエステ(自由港)		91		191		21			0.3		-91	-100
日本		82		195		24			0.3		-82	-100
メキシコ		73	2	220	4	30	20.0		0.3	0.0	-71	-97
デンマーク		58	9	194	25	33	27.8		0.2	0.1	-49	-84
チェコスロバキア	53	21	3	124	3			0.5				
ポーランド	52							0.5				
スウェーデン	34	6	12	31				0.3				
ギリシア	15							0.1				
エジプト	10	1		1				0.1				
トルコ	5	16		53				0.0				
イタリア	1	36		130				0.0				
その他	21							0.2				
世界合計	10,862	26,092	6,207	77,955	6,338	30	10.2	100.0	100.0	100.0	-19885	-76

出所：1920年についてはLinder (1956: 99)、1928年と1938年についてはLinder (1956: 100-101) より作成。ただしそれらの原資料は Statistik des auswärtigen Handels

Österreichs と記されている。

注：Linder (1965:100-101) には66の仕向け地に関する数値が列挙されているが、その100頁には明らかな誤記載がある。それは各仕向け地を記載した行とそれぞれに対応する輸量・金額を記載した行とがずれているために起きた問題である。しかし101頁にはその問題がない。上記の表4では原表の誤記載を補正して作成した。なお、101頁の最後に記されている合計値と仕向け地別の値の加算値とが、わずかではあるが一致しない。本表では仕向け地別に記されている数値に基づき、かつ相対的に重要な26の仕向け地を取り出して作成した。

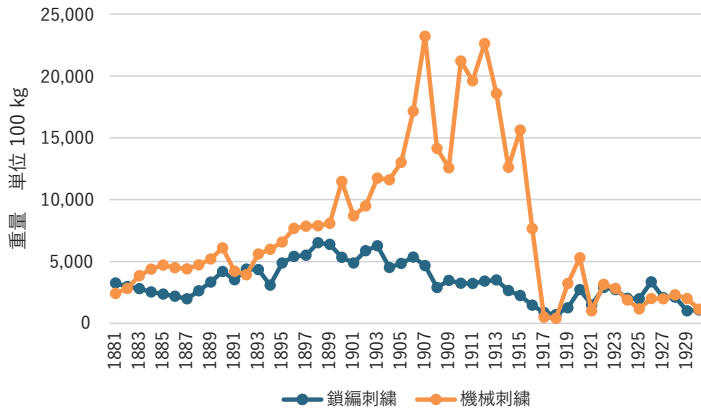


図1 フォラルベルクからスイスへの鎖編刺繍と機械生産になる刺繍の加工貿易（再輸出）量の推移

出所：Linder (1956: 76, 87) より作成。

注：加工貿易に関する原資料は Saxer, A. (1931) Der Stickereiveredelungsverkehr mit dem Ausland, Bern, S.413-415、及びS.419, 420, 426に掲載されているデータと Linder (1956: 76, 87) に注記されている。Saxer (1931) の正確な書誌情報については本稿末尾の文献一覧を参照されたい。1911年以降は平織刺繍 (Plattstichstickerei) の再輸出量であることが Saxer (1931: 426) に記されている。この文献は次の URL で入手可能。https://www.sgvs.ch/papers/sjesBackIssues/1931_PDF/1931-I-24.pdf なお、Linder (1956: 76) と Saxer (1931: 413-415) を照合したところ、一致していることを確認した。Linder (1956: 87) と Saxer (1931: 419, 420, 426) を照合したところ、これも一致していることを確認した。

ストリア・ハンガリー帝国領土だったが第1次世界大戦後に独立した国々への輸出を合計すればイギリスへのそれよりも多かった。これは、既に第1次世界大戦以前にフォラルベルクから帝国内他地域への移出がある程度なされていたことを示唆する。

1920年代末までに次第に、他の欧州諸国やイギリスの植民地などへの輸出が増加した。その結果として、1928年時点でのスイスへの輸出量は1920年のそれに比べて大きく増えたものの、全世界への輸出量に占めるその比重が50%台にまで下がった(表4)。南北両アメリカ大陸諸国やアジア諸国にも少ない量とはいえ輸出されるようになったことも東スイスへの一辺倒依存から脱することに貢献した。これはフォラルベルクのパブリカントによる努力の成果だった。

ただし、西欧諸国の植民地や日本に輸出した刺繍製品の単価は、欧米諸国への輸出単価に比べて低かった。

しかし、大恐慌を契機にして輸出量は大きく減少したし、その減少幅と率は特に東スイスに対して顕著だったことも表4から分かる。結果として東スイスへの依存度がさらに大きく下がった。それはフォラルベルク製刺繍の輸出量・輸出額の減少(図2)と刺繍工業従事者数の減少(表5)につながった。

もっとも、この産業での生産と輸出が第2次世界大戦の勃発とその継続によって消滅したわけではない(表6)。むしろ1941年までに総販売額が増え輸出額が減少した。これは1938年にオーストリアがドイツに併合されたために、それまでの輸出のうちドイツ向けが国内向けと

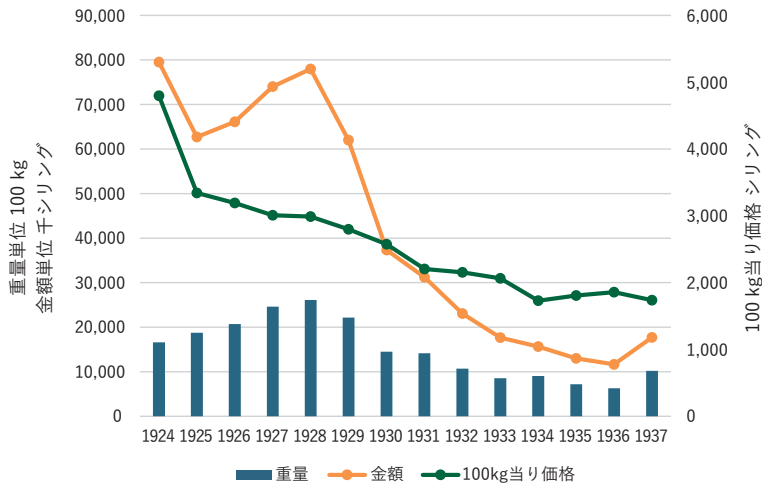


図2 フォラールベルク製綿刺繍輸出量と輸出金額の推移 1920～1939年

資料：Linder (1956: 93) より作成。

注：原資料は Statistik des auswärtigen Handels Österreichs der Jahre 1914-1938。1939年については Handelskammer Feldkirch 提供と記されている。

表5 機械種類別にみたフォラールベルクにおける刺繍生産従事者数の変化 (フルタイム従事者換算の概数)

年	鎖編刺繍	手動刺繍機械	シフリ機械	合計
1910	3,300	5,000	3,500	11,800
1920	2,000	1,500	3,200	6,700
1930	1,000	500	2,800	4,300
1940	200	200	1,700	2,100
1950	200	150	1,500	1,850

出所：Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 188)

注：原資料は Dr. W. Mühlwerth によると記されている。

なったためである。Mühlweth (1941: 156) は当時のドイツ国内の刺繍産地であるザクセンヤズデーテンとの競争激化を指摘しつつも、フォラールベルクの刺繍産業の発展にとってナチスドイツに併合されたことがよい効果をもたらすと述べた所以である。しかし彼の見通しが正しかったとは到底言えない。戦争の継続拡大が民生品の生産輸出にプラス効果を発揮することはないからである。1944年と1945年にも生産と輸

表6 1937年から1943年までのフォラールベルク製刺繍の販売額と輸出額の推移

年	総販売額		輸出額		輸出比率 %
	企業数	RM 1000	企業数	RM 1000	
1937	37	9,575	33	7,705	80.5
1938	39	9,881	34	7,093	71.8
1939	42	9,969	31	3,867	38.8
1940	39	8,968	22	994	11.1
1941	40	12,325	12	655	5.3
1942	38	11,295	6	326	2.9
1943	39	7,697	11	334	4.3

出所：Linder (1956: 95)

原資料は Landeswirtschaftsamt Abteilung Statistik (1945) Vorarlberger Wirtschafts- und Sozialstatistik, S.153

注：RM とは当時のドイツの通貨ライヒスマルクのことである。オーストリアは1938年にナチスドイツに併合されたので、ドイツへの輸出が国内向けとして扱われた。

出がなされたか否か正確なことは分からないが停止のやむなきに至ったと考えられる。

2.4. レース生産の開始

刺繍とは異なるレース生産の開始と展開とについてのKammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 180-182) の記述を紹介しよう。ボビン (bobbin 即ち Klöppel) と独自の機械を用いるレース生産が、第1次世界大戦後のインフレーションの時期にフォラルベルクで盛んになされるようになった。刺繍への需要が世界的に減少して生産が落ち込んだ時に、レース生産に転換あるいはこれを取り入れる刺繍ファブリカントが出てきたからである。その際に、ドイツにおけるレース生産の中心となっていたエルバーフェルト・バルメン (Elberfeld-Barmen)、即ち現在のヴッパータール (Wuppertal) からレース生産の技術者を招いてこの事業に乗り出すところが出てきたし、そうした技術者がフォラルベルクで企業を設立した場合もあるという。特に1922年から1927年の期間にフォラルベルクでレース生産企業が増えた。その結果、1927年には約40企業がレース生産を行なうようになった。その市場としてはスイス経由でのイギリスが重要だった。ところが1927年にイギリスは突然レースの輸入に33.3%の関税をかけたため、そこへの輸出が途絶えた。そこで、ウィーンに拠点を置いてオーストリア国内市場及び南東欧市場を支配していたユダヤ商人に依頼して別の販路を開拓しようとしたが、世界大恐慌によってそれも不可能となり、1934年にはレース生産企業の3分の2が破産した。1938年にオーストリアがドイツに併合されると、フォラルベルクにとっての市場が大きく広がったので、レース生産企業の景気も回復したが、総力戦となった1942・43年には再び生産が大きく落ち込んだ。

3. 第2次世界大戦後1970年代初めまでの刺繍・レース工業の成長

3.1. 1940年代末頃の状態に関する刺繍工業連合事務局長の認識

1940年代末頃の状態について、フォラルベルク刺繍工業連合事務局長 (Geschäftsführer des Verbandes der Vorarlberger Stickereiindustrie) となっていたヴァルター・ミュールヴェルト (Mühlwerth 1950) が概略次のように記している。

第1次世界大戦以前にフォラルベルクの刺繍輸出は、オーストリアの純輸出額の約10%を占めていたが、世界大恐慌と第2次世界大戦の影響を受けて見る影もなくなり、消滅したという噂をたてられた。戦争が終わった直後にもほぼ仮死していると言われた⁸⁾。しかし、戦後もなく新しい生命を得て目覚めた。3年間の復興努力により、使える刺繍機械のすべてが稼働して輸出もかなりの量となり、最初の目標を達成することができた。貿易政策のゆえにかつての輸出先の中には以前ほどの輸出ができていない国もあるが、新しい輸出先を開拓できたので、その構成は10年前と同じ程度に多様化した。

オーストリアの国内市場は小さいので、刺繍工業がかつての隆盛を取り戻すためには輸出に頼らざるを得ない。しかし、刺繍のための原料は主としてスイスからの輸入に頼らざるを得ないし、そのための支払はスイスフランでしなければならないが、輸出先から受け取る販売代金はハードカレンシーとは限らないという問題がある。ハードカレンシーでの輸出代金を受け取るためには西ドイツとアメリカ合衆国への輸出を増やす必要がある。西ドイツについてはその自由貿易政策のゆえに大きな問題はないが、アメ

リカへの輸出は簡単ではない。というのはアメリカでは刺繍工業が盛んだからである。とはいえ、その品質はフォラルベルクのそれに劣る。

フォラルベルクに存在している刺繍機械のうち修理を必要とする機械の比率がかなり高いし、休機していた期間が長期にわたったためにそれを使える人材がないという問題がある。それゆえ機械を外国に販売する所有者も出てきている。こうした問題を克服するためには連帯意識が必要である。ファブリカント、輸出業者、刺繍職人が連帯してかなりの拠出をした基金がある⁹⁾。その基金から無利子での資金融通を受けて刺繍機械を修理したり休機している機械を買い上げたりするという施策が必要である。このようにしてフォラルベルクの刺繍生産を増加させることが望まれる。

長期にわたる停滞のゆえに刺繍のための機械工やパンチング業者あるいはその他の専門工後継者が不足しているという問題がある。この問題を解決するためにあらゆる手立てを講じる必要がある。最善の支援策は就業を増やすことであり、それによって稼ぎを増やすことである。そうすれば近い将来においてフォラルベルクの刺繍工業は正常な状態に戻ることができるであろう。

以上のミュールヴェルトの認識は恐らく1948年後半頃のものとして推定される。復興努力を3年間続けたと書かれているからである。その認識は概ね首肯できるが、最後に述べている支援策は策というよりも支援目標とすべきであろう。就業を増やすということは供給力を増やすということであるが、そのためにはより多くの需要が必要である。つまり市場開拓が必要である。その市場開拓先として西ドイツとアメリカを挙げているが、そのためにどうすればよいのか、

ということについてミュールヴェルトはなにも記さなかった。

3.2. ファブリカントとローンシュティッカーの連帯

刺繍生産企業の連帯という点では、1885年に結成された「東スイスとフォラルベルクの刺繍工業中央連合 (Zentralverband der Stickereiindustrie der Ostschweiz und des Vorarlbergs)」(山本 2025: 28) が重要だったはずだが、Staudacher (2019: 23) によれば1893年に機能しなくなっていた。しかし、1932年に州法として制定された「危機基金法 (Krisenfondgesetz)」¹⁰⁾ で刺繍危機基金が設定されたし、Hessenberger (2016: 14) によるとファブリカントや輸出業者がフォラルベルク刺繍工業連合を1946年に結成した。それだけでなく、ローンシュティッカーの団体としてフォラルベルク刺繍手工業組合 (Vorarlberger Innung der Sticker) が結成されていた。この結成年は分からないが、刺繍工業連合とほぼ同じ頃と考えられる。

第2次世界大戦後の具体的な連帯活動として最も重要なのは1956年に制定された連邦法「刺繍支援法 (Stickereiförderungsgesetz)」¹¹⁾ に基づく管理委員会 (Verwaltungsausschuß) の活動である。この法律の第4条によれば、管理委員会は刺繍工業が不況に陥った場合に刺繍機械の稼働時間を制限したり、休機させたりする権限を持っていた。休機は刺繍機械の稼働を物理的に不可能にするための鉛による封印措置 (Prombierung) による。その際には補償金が危機基金から支払われる。これはローンシュティッカーが所有する刺繍機械だけでなく、ファブリカントのそれにも適用された。そのほか、ローンシュティッカーがファブリカントや輸出商から受け取る賃加工

代金の最低額を制定する権限も持っていた。なお同法第2条第1項によれば、管理委員会委員は刺繍工業連合加盟企業の中から4名、刺繍手工業組合に加盟するローンシュティッカーの中から4名、これらとは別に委員長1名と副委員長2名、そして商工会議所（Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg）から1名、合計12名の委員から構成される。委員長1名と副委員長2名は商工会議所からの委員を議長として刺繍工業ないし輸出企業及びローンシュティッカーから選ばれた8名の会議において3分の2以上の同意を得て選ばれるものとする、と第2条第2項で規定されている。

Meusburger (1972: 138-139) によれば、「刺繍支援法」は1962年に改定された¹²⁾。この連邦法によって、景気の良い時には刺繍機械を全く休みなく1日24時間1週7日間稼働してもよいが、フォアールベルク全体での受注量が少なくなった際にはできるだけ多くの機械を稼働できるよう、稼働時間を制限することとなった。例えば、5台の機械が3週間休機せざるを得なくなった場合、すべての刺繍機械の稼働時間が早朝5時から夜間の午前1時までで、即ち1日当たり20時間に制限された。また休機する機械1台につき1日当たり165シリングが刺繍危機基金から支払われた。これによって零細規模の家族経営になるローンシュティッカーは最低限の生活が保障された。基金に対する政府からの補助金は皆無であり、すべて刺繍企業やその従業員による拠出金から構成された。1950年からの20年間で基金から支援を受けた事業者が出現したのは2回あった。最初は1958年で164台の機械が累計で1866日休機した。第2は1967年で460台の機械が累計5530日休機した。どちらも平均して1台当たり実質11日～12日間休機したことになる。

3.3. 1960年代までの輸出動向

Winsauer (1965: 54) によれば、1910年にフォアールベルクに存在していた62の刺繍工場即ちファブリカントのうち、2つの世界大戦とその間の不況を乗り越えて存続できたのは10しかなかったし、1936年に40あった刺繍工場のうち第2次世界大戦後も操業を続けているのは23しかなかった。しかしファブリカントの数が減ったとはいえ、その多くがより大きな生産力のアウトマーテンシフリ刺繍機械を駆使し、ローンシュティッカーも東スイスの輸出商やファブリカントの下請ではなく、フォアールベルク内での取引で活動するようになっていたので、1951年から52年にかけての時期を除いて1957年までほぼ順調に伸びる輸出需要に対応できたと考えられる。

実際、世界大恐慌を経てもフォアールベルクで設置されていた刺繍のための機械台数は表1で示したように減少したものの皆無になっただけではなかったので、1947年にはわずかに約48万シリングの輸出額に過ぎなかったが、素材の調達が進んだ1948年以降、輸出額が急増し、1951年には1億3200万シリングを越えた(図3)。この輸出急増にはマーシャルプランによる支援と、スイス・フォアールベルク間の貿易を許可したフランス占領軍政府の施策も寄与したと考えられる¹³⁾。1952年に若干輸出額が減ったが、その後再び急増し、1957年には5億シリングを越えた。しかし1950年代後半から1960年代初めまでわずかとはいえ輸出減少になる年もあった。

ヴィンザウアは1966年の輸出先について記述している。これによれば世界103か国に輸出し、最大の輸出先は欧州であり、オーストリアが加盟していたEFTA諸国よりもEEC諸国への輸出の方がはるかに多かった(表7)。フォアールベ

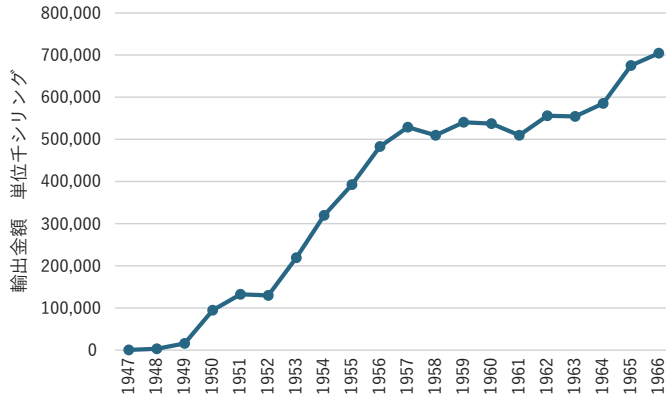


図3 フォラルベルク製刺繍輸出金額の推移 1947～1966年

出所：Winsauer (1967: 18) より作成。

注：原資料は Winsauer (1967: 18) に明記されていないが、Eugen Ruß Verlag (1954: 96) にフォルベルクからの刺繍輸出金額の1954年までの統計数値が掲載されており、その出所は Vorarlberg Wirtschaft- und Sozialstatistik と記されている。これによれば、1948年から1952年まではおなじ数値となっているが、1953年は219,373シリング (Winsauer は219,365と記した)、1954年は未確定値として303,637 (Winsauer は319,488と記した) シリングとなっている。

ルクの刺繍輸出金額は1966年にオーストリアが輸出する繊維製品の17%を占め、フォルベルクからの繊維製品輸出金額の43%に上ったことをヴィンザウアは指摘している

(Winsauer 1967: 19)。フォルベルク経済にとって刺繍・レースの生産がいかに重要だったかということが表8からも分かる。

表7 フォラルベルクからの刺繍の輸出先 1966年

輸出先	100万シリング	比重
欧州	458,521	65.1
EEC	277,010	39.3
EFTA	155,057	22.0
その他	46,454	6.6
中近東	19,366	2.7
極東	57,703	8.2
アフリカ	63,117	9.0
カナダ・アメリカ	30,176	4.3
中米	13,725	1.9
南米	25,218	3.6
オセアニア	36,654	5.2
合計	704,480	100.0

出所：Winsauer (1967: 18-19)。原資料は不明。

注：EEC、EFTA、その他の欧州諸国の数値を合計すると478,521となり、欧州の合計値として Winsauer (1967: 18-19) に記された数値458,521と一致しない。

表8 フォラルベルクの商品別輸出比率 %

	1963年	1970年
刺繍・レース	33.7	19.0
その他の繊維衣服	37.2	43.7
機械・金属・電気機器	9.4	18.1
紙・木材・木工品	8.6	8.8
その他	11.1	10.4
合計	100.0	100.0

出所：Verlag Eugen Ruß (1972: 24)

3.4. フォラールベルク州内での刺繍生産の地理的分布

1960年代前半における刺繍に関するファブリカント、輸出業者、ローンシュティッカーのフォラールベルク内におけるゲマインデ別の分布についてはBrüstle (1965) が記録しており、これに基づいてウィーン大学のディプローム学位論文であるHollenstein (2001: 33) が表を作成していたので、この資料に基づいて当時の分布状況を示したのが図4である。ファブリカント25社のうち13社が、輸出業者75社のうち53社が、ローンシュティッカー374社のうち221社がルステナウに立地しており¹⁴⁾、ルステナウへの集中度が高かった。これと比べて大きな差があるとはいえ、南に隣接するホーエネムス (Hohenems)、この西のアルタハ、さらに南のゲッツイス (Götzis) にもローンシュティッカーが比較的多くいた。ファブリカントの複数社立地という意味でホーエネムスとドルンビルンも重要である

ルステナウが刺繍生産の中心となっていることを設置されている刺繍機械の数で確認したのが表9である。1960年代にはこの町にフォラールベルク内の刺繍機械の過半数が集中集積していた。しかもその集中度がアウトマーテンの台数増加によって1964年までの間に高まった。ホーエネムスとアルタハはルステナウに次いでいるが、設置台数がはるかに少ないし、その増加数もわずかだった。ともあれ、第2次世界大戦後のフォラールベルク刺繍工業はラインタール中部に集積するようになっていた。なお、Hollenstein (2001: 33) は手動刺繍機械のデータを示していない。1960年代にはもはや使われなくなっていた可能性があるが、管見の限りでこの点について言及している文献はなく、断定できない。

3.5. 1950年頃のレース (Klöppelspitze) 生産の状況

Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 182) によって1950年頃のレース生産について紹介しておこう。オーストリアで生産されたレースのうち98~99%がフォラールベルク産だった。ほかにはシュタイアマルク州でわずかに生産されただけである。フォラールベルクの中ではルステナウとその東に位置するヴォルフルト (Wolfurt) が中心的生産地であり、これらに近い位置にあるラインタール中部の村々にも広がっている (図5)。フォラールベルク全体のレース生産事業所数は34、機械台数は1001、ボビン総数は57,442である。スイスにはフォラールベルクほどに多くのレース生産企業はなく、ザンクトガレン、ヴィル (Will)、アールガウ (Aargau) に立地しているに過ぎないとのことである。

レース生産企業はなんらかの点で刺繍企業と関係していた。これの倒産後の工場がレース生産企業に変わったものもあれば、刺繍を主業としてレースを生産した企業もある。相対的小規模企業はレース生産専業ではなく、レース生産も賃加工していたに過ぎない。ただし、賃加工ではなく、卸売業者からの受注により、自身で原材料を調達し、自身で文様を製作して生産する相対的小規模企業もあった。

なお、刺繍製品と同様レースについても、オーストリアにおけるその生産が100% フォラールベルクに集中している、とKammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 201) に記されている。それはこの商品の生産のための機械の設置場所で見分かれるというのである。しかし、既述のように、同じ書籍の182頁に98~99%の集中と記されているので齟齬がある。これに対



図4 1961年時点での刺繍ファブリカント、輸出業者、ローンシュティッカーが操業していたゲマインデ

資料：Hollenstein (2001: 33) に基づき筆者作成。

注：ゲマインデ名の後に記した最初の数値がファブリカント、2番目が輸出業者、3番目がローンシュティッカーの企業数。

表9 ゲマインデ別に見たフォラールベルク州内に設置されている刺繍機械の分布 1960年と1964年

ゲマインデ名	パントグラフ		アウトマーテン		合計		比率 %	
	1960年	1964年	1960年	1964年	1960年	1964年	1960年	1964年
Altach	2	2	83	94	85	96	12.6	12.5
Dornbirn			30	32	30	32	4.5	4.2
Götzis	6	6	17	19	23	25	3.4	3.2
Hohenems	7	7	95	100	102	107	15.2	13.9
Lustenau	39	39	311	379	350	418	52.0	54.3
Satteins			20	11	20	11	3.0	1.4
Wolfurt	1		9	21	10	21	1.5	2.7
その他	5	6	48	54	53	60	7.9	7.8
合計	60	60	613	710	673	770	100.0	100.0

資料：Hollenstein (2001: 24, 33)

注：依拠した史料はBrüstle (1965: 52-54) となっているが、原資料は刺繍支援法に基づいて設置された管理委員会の年次報告書であると思われる。

して刺繍機械で生産した商品はオーストリア内で100%フォラールベルクに集中していたことは確実である (Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 201)。

3.6. 1950年代半ば頃の有力刺繍企業の概要

Eugen Ruß Verlag (1954) には、1950年代半ば頃のフォラールベルク州に立地する有力企業に関する紹介記事が掲載されている。当時の主要産業は繊維衣服工業だったので、この分野の企業が最も数多く紹介されている。その中で刺繍あるいはレースを1950年代半ば時点で生産していた企業は29社に上る。そのうちルステナウ立地企業が16社、ホーエネムス立地企業が5社、ドルンビルン立地企業が3社あり、アルタハ、ザットアインス、ネンツィング、ハルト、ベーツァウに立地する企業が各1社あった。

それらの中で、紹介記事から判断すると刺繍専門企業数は13社、刺繍とレースの両方を生産する企業が10社、刺繍とニットないしメリヤスを生産する企業が3社、刺繍とそれ以外の布地も生産する企業が2社、レースのみを生産する企業が1社となっている。上記以外に、1930

年代あるいは第2次世界大戦後に刺繍生産から撤退し、別の繊維製品の生産に転換した企業3社も紹介されている。その中にはフォラールベルク最初の刺繍工場だったホーファー・ベシュ社 (Hofer, Bösch & Co.) や最大企業だったこともあるリヒャルト・ヘンメルレ (Richard Hämmerle) が含まれる。また、刺繍の生産ではなく、その精製に従事する大企業でドルンビルンに2023年でも立地して操業していることを筆者自身が現地で確認したフーセネガー (Fußenegger) 社がある。

以上の諸企業の中から特に紹介に値すると筆者が判断した15社の概要を以下に記す。各紹介記事の執筆者は明示されていないが、その内容からして各企業から提出された文章と写真を掲載したものと判断できる。

① ヨーゼフ・ケーニヒ繊維工場 (Textilfabrik Josef König & Co., Lustenau)

1928年に設立され、1950年代半ば時点でルステナウ最大の繊維企業となった。主業は刺繍生産だが、メリヤス製品、ウーステッド地も生産している。大型刺繍機械を32台装備しており、オーストリア最大規模となった。全



図5 1950年頃のボビンを用いるレース生産企業の分布

資料：Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 182) に基づき筆者作成。
 注：ゲマインデ名の後の最初の数値が事業所数、次の数値がレース生産機械台数。原資料は Sektion Industrie によると記されている。これは Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg の 1 部門であると解釈できる。

世界各国に輸出し、そのデザインは自社独特のもので、エキゾチックな文様の刺繍も生産していた。自社製のデザインは1万以上あり、これに応じて実際の製品の種類も多様性に富んでいた。婦人服やブラウスなどに用いられる刺繍縁飾り (Broderie) のほかに、Ätzspitze (空隙部分が多いレース)、ランジェリー (婦人用下着) のためのナイロンレース、Tüllspitzen (ネットレース 編み飾りレース)、薄手布地カーテン、装飾用ハンカチーフ、オリエント風多色スカーフ等も生産していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 134-135)。Verlag Eugen Ruß (1972: 139) でも、オーストリアで最大規模の刺繍工場として紹介されているが、文章はなく、工場敷地見取り図とシフリ機械10台以上が並んでいる工場内の写真のみの紹介である。

② ヨーゼフ・ベシュ (Josef Bösch, Lustenau)

1938年に輸出商として創業した。戦後、平屋建ての事務所を2階建てに増設し、そこにはフェルガーの居場所も確保した。配下のローンシュティッカーや内職者は120名に上る。1952年頃からの好景気のゆえに自社のために稼働しているアウトマーテンのシフリ刺繍機械は30台から40台に上り、自社所有のアウトマーテンも6台あり、主に綿刺繍を生産していたが、オーガンジー (Organdywaren 薄い綿布地) も生産していた。輸出は代理店に依存していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 136-137)。Verlag Eugen Ruß (1972: 140) でも Josef Bösch Stickerei- und Raschelspitzenfabrik という名前で紹介されているのでレースも生産するようになったことが分かる。この頃には工場主と営業担当トップとが世界中を営業のために旅行しており、各国に配置している代理店の数は70に、従業員数は約150名に上っ

た。高品質と信用力ある経営 (Qualität und seriöse Geschäftsführung) が創業者に由来するこの企業のモットーだった。

③ ヘルマン・フェント (Hermann Fend, Hohenems)

1911年に東スイスの輸出商のためのローンシュティッカーとして創業し、当初は刺繍ランジェリーやレースを生産した。その当時には6台の刺繍機械を所有し、パントグラフやアウトマーテンを操作できる従業員を雇用していた。しかし、1924年に外国市場との自社独自のつながりができて、1927年には機械台数を10台に増やし、その後工場建物も増築した。1950年以来、輸出比率は90%を越えた。1950年代半ば時点で、従業員と内職者を含めて120名を雇用していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 138-139)。この企業は Verlag Eugen Ruß (1972: 136-137) でも紹介されている。そこではフェルガーかつローンシュティッカーとして1912年に創業した、と記されている。自社所有機械とローンシュティッカーとによって生産を順調に拡大し、まずオーストリア・ハンガリー帝国内で市場開拓し、後にベルギー、オランダを主要市場とした。この当時の主要商品は刺繍肌着だった。14台のアウトマーテン、2台のパントグラフ、2台のパンチ機械を用いて、150名の従業員が1953年以降継続して2交代制での操業を続けてきていた。年間販売額は5千万シリング。海外市場向けは80%。国内向けは少女用の刺繍製品だった。経営方針として重視しているのは、一方で生地コレクション (Stoffkollektion) の充実を指向し、他方で国際的なスタイリストやオートクチュール (高級仕立服) 業者、国際的に名の通っている流行婦人服アパレル業者との協力

だった。価格を低くするよりも高級品を生産することを方針としていた。35か国に25の代理店を配置しており、これらへの訪問のために海外旅行を幹部が頻繁に行っていた。婦人服のためのレース生地が主たる生産物であるが、紳士用や、家具調度品のための刺繍も生産し、西欧、極東、アフリカ諸国を主たる市場としていた。代表のアントン・フェント (Anton Fend) はフォアールベルク刺繍工業連合の会長職についていた。

④ グラ ー プヘア・ シェフクネヒト社 (Granbher, Scheffknecht & Co., Lustenau)

合名会社として1931年に設立された。その3年後に200万フランの輸出を東スイスの輸出商に依存せず、自社独自に行なった。それはインド向けであってサリーのための人絹刺繍で、その布地の長さは総計300万メートルに及び、600箱分に上った。1950年時点で企業の代表はアルトゥール・シェフクネヒト (Arthur Scheffknecht) が務め、自社内刺繍職人や内職刺繍職人を約100名雇用していた。年間の輸出額は約1千万シリングに上り、主要輸出先はカナダ、アメリカ、南アフリカ連合、オース

トラリア、インドだった。欧州諸国への輸出は少ないがその中ではドイツとイギリスが多かった。これらの諸国には代理店があった (Eugen Ruß Verlag 1954: 140-141)。

⑤ アルフレート・ホレンシュタイン社 (Alfred Hollenstein & Co., Lustenau)

1918年に創業し、まずウィーンを拠点としてバルカン半島や近東に輸出した。その後、イギリス、ルーマニア、トルコ、エジプト、ペルシアなどにも輸出したが、東アフリカとインドを主要輸出先とするようになった。商品は綿や人絹で刺繍したネットレース (網目レース) などだった。第2次世界大戦によって従業員が戦争のために召集され、女性たちも戦争のために動員されたので、事業はほとんど停止状態となった。しかし、中立国や友好国などからの受注を得て、わずかに生産を継続できた。1941年に取得した特許のゆえに、第2次世界大戦後、大型機械で十字架刺繍 (Kreuzchen-Stickerei) の生産を比較的早く再開した。これを飾り付けた婦人用や子供用の既製服を生産する部門を持っていた。戦前に主たる輸出先としたイギリス、インド、モロッ



写真1 グラ ー プヘア・シェフクネヒト社の刺繍機械

出所 : Eugen Russ Verlag (1954: 141)。

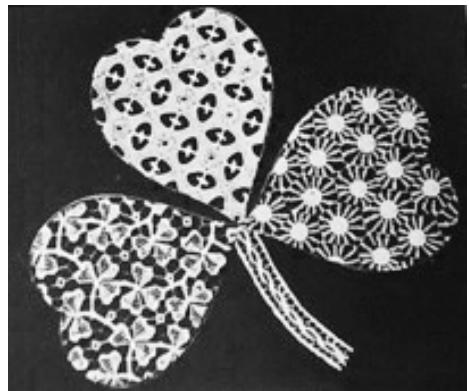


写真2 アルフレート・ホレンシュタイン社の刺繍製品例

出所 : Eugen Russ Verlag (1954: 145)。

コへはそれぞれの貿易・関税政策のおかげで輸出が困難となったが、1948・49年以降世界各地への輸出が伸びた。1950年代半ば時点での刺繍・レースの種類は多様性に富んでいた。主たる輸出先が欧州、両アメリカ大陸、オーストラリア、南アフリカであることを示す概念図が掲載されている（Eugen Ruß Verlag 1954: 144-145）。

⑥ オスカル・アルゲ合資会社（Oskar Arge K.G., Lustenau）

ホーファー・ベシユ社で技能実習をしたオスカル・アルゲが1920年に創業した。オーストリアで最も早く創業した刺繍輸出商社に属する。ベルギー、オランダ、イギリス、オランダ領インド、英領インドが主要な輸出先だった。1928年以降不況となったが、それでも当時フランス領モロッコに輸出できるようになり、不況をなんとかしのいだ。1938年にオーストリアはドイツに併合されたので国内向けとして事業を存続できたが、第2次世界大戦勃発で事業ができなくなった。しかし、戦後、かつての外国市場とのつながりを復活させたり、新しい市場を開拓できたりして、業容を拡大した。1950年代半ば頃の主要市場は第1にドイツであるが、イギリス、メキシ

コ、オランダ、スウェーデン、ベルギー等にも輸出した。商社機能だけでなく、刺繍生産もしていたことが写真3の下に描かれている文字で分かる（Eugen Ruß Verlag 1954: 146-147）。

⑦ アロイス・アマン（Alois Amann, Hohenems）

1896年にザンクトガレンの輸出商のためのローンシュティッカーとして創業し、1897年に自前の工場建設を始め、1902年にそれを拡張し、1906年に完成した。1910/11年に現在の本社工場を建設し、この頃にローンシュティッカーとしてではなく、自前の文様で独自販売するファブリカントとなった。第1次世界大戦までは当時の広大なオーストリア・ハンガリー帝国が市場だった。1929年以降の不況時にも、創業者の死去後に後を継いだ2人の息子が独自に海外市場を開拓し、内戦後のスペインに輸出した。オーストリアからスペインに輸出された刺繍の90%はこの企業によるものだった。第2次世界大戦後は13台の刺繍機械の稼働と多くのローンシュティッカーへの発注によって増大する受注に対応していた（Eugen Ruß Verlag 1954: 152-153）。

⑧ ダニエル・メツツラーの遺産（Daniel Metzler's Erben, Satteins）

手動刺繍機械を設備して1896年にスイスの輸出商のためのローンシュティッカーとして創業した。後にザウラー社製のパントグラフ4台を導入した。1912～13年に工場を拡張し、新品のアウトマーテンシフリ刺繍機械を11台設置した。さらに後に、パンチング・反復・裁断のための各機械（Punsch-, Repetier- und Ausschneidemaschine）も導入した。大恐慌とこれに続く時代に事業が縮小し、第2次世界大戦中は操業できなかったが、1948年に操業を再開した。1950年代半ば時点でアウトマー



写真3 オスカル・アルゲ社の刺繍製品例
出所：Eugen Euss Verlag (1954: 147)。

テンを15台を装備し、空隙部分が多いカットレース（刺繍レース）（Ätz- (Guipure-)）、リボン (Band-)、装飾 (Einsatz-)、オールオーバー (Allovers-)、カンブリックステッチ (Cambric-)、網目状薄地 (Tüll-)、ナイロン (Nylon-)、ペルロン (Perlon-) など¹⁵⁾、あらゆる種類の刺繍やレースを生産していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 156-157)。

⑨ J. シャラート & 子息たち (J Schalaat & Söhne, Nenzing)

1882年に創業し、1898年に商業登記簿に登録した。1902年に新しい工場を建てて、シフリ刺繍機械8台を装備し、多くのローンシュティッカーにも生産委託した。第1次世界大戦中には操業停止せざるを得なかったが、戦後にシフリ刺繍機械を撤去し、ボピンでのレース生産機械（クレッペルシュビッツ機械）25台を装備し、1928年に42台増設した。さらに後にレース生産機械を19台装備し、レース生産分野でオーストリア最大の企業となった。1939年に合名会社となったが、第2次世界大

戦中には操業停止せざるを得なくなった。1950年代半ば頃には綿、人絹、ナイロン、ペルロンなどをボピンでレース (Klöppelspitzen) 生産し、ほかにもあらゆる種類の刺繍、そしてカーテンや下着などのためのニット（メリヤス）を生産していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 158-159)。

⑩ ドウレクセル兄弟 (Gebrüder Drexel, Hohenems)

1906年頃に3台のパントグラフをもって創業した。フェルガーを通じてザンクトガレンの輸出商に販売し、ザンクトガレン製刺繍として全世界に販売された。景気が悪くなった時もこれを乗り越えて10台のアウトマーテンシフリ刺繍機械を装備し、国内外から受注を獲得して、1930年代も順調に操業を継続し、1940年代に入るまでそれを継続した。1939年に兄弟の1人が死去し、戦時中には熟練労働力が不足し、素材の入手が困難となったために成長を続けることができなくなり、操業困難に陥った。しかし、戦後に所有していた機械を順次稼働させることができた。創業時から協力して会社を運営してきた3兄弟全員が亡くなったが、後継者が事業を継続した。従業員数は40名に上り、2交代制で生産を続けた。当社の製品は、ブラウスと衣服のためのAllover、Ätzstickereien、ナイロン刺繍編み、縁飾り品 (Besatzartikel)、ハンカチである。頻繁に変わるモードには、有能で信頼のおけるデザイナーのおかげで対応できているし、多様な販売市場に対応して新しいサンプルがつくられる。注文がたくさん来るが、機械を増やすことができないので、そのすべてに対応できたわけではない (Eugen Ruß Verlag 1954: 160-161)。

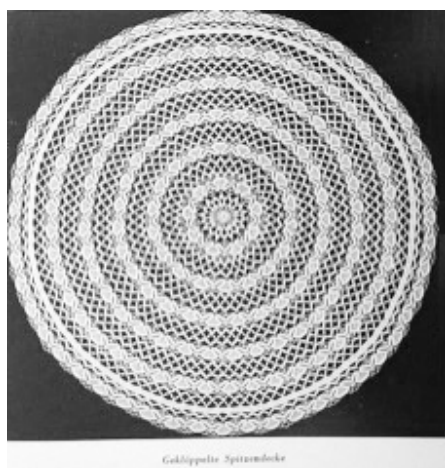


写真4 J. シャラート & 子息たち社の製品例 (レース製テーブル掛け)

出所：Eugen Russ Verlag (1954: 158)。

⑪ レングレ兄弟 (Gebrüder Längle, Altagh)

1896年に3人の息子とともに手動刺繍機械を購入して創業した。後にパントグラフとアウトマーテンのシフリ刺繍機械を購入した。1912年には10台のアウトマーテンを所有し、ローンシュティッカーにも委託して生産を拡大した。世界大恐慌による打撃を受けたが、雇用を維持するために1932年にニット生産も手掛けるようになった。さらにウィーンのフリクサ (Frixia) という工場を購入し、企業規模を拡大した。第2次世界大戦後に輸出を再開でき、売り上げも増加してきた。1950年代半ば時点で、メリヤス (ニット) とあらゆる種類の刺繍の両方を生産し、従業員数が300名を超え、そのほかに内職生産者もかなりの人数を雇用した。1953年には新しい工場を立ち上げ、従業員家族のための住宅を6棟建てた。生産品目には、婦人用、紳士用、児童用の上着や下着や紳士用靴下のための丸編みニットなど (Interlock-, Rundstrick-, Kettstuhlstoffen) がある。ナイロンやペルロンを用いるブラウスへの外国市場からの需要があった。勤勉 (Fleiß)、節約 (Sparsam)、拡大構築への意思 (Aufbauwillen) によって企業規模を拡大してきた (Eugen Ruß Verlag 1954: 164-165)。Verlag Eugen Ruß (1972: 106-107) によれば、1970年代初めにニット製品の80%を国内市場向けに生産し、刺繍製品はほとんど輸出していた。

⑫ アードルフ・ヘンメルレ刺繍輸出 (Adolf Hämmerle Stickerei Export, Lustenau)

1906年にフェルガーとして25歳でアードルフ・ヘンメルレが創業した。アメリカの関税政策によってこの市場を失ったことをきっかけにして、自ら刺繍機械を購入して生産者に

転換し、ウィーン市場で1910年代初めに成功し、作業場付き住宅を購入した。しかし第1次世界大戦とその後のインフレの打撃を受け、またオーストリアの国内市場が極端に小さくなったために事業を一からやり直さざるを得なくなった。刺繍不況の時期には政治家としてゲマインデと州の政治に関わった¹⁶⁾。その政治活動のゆえに第2次世界大戦中に強制収容所に収容されたが、戦後、輸出商として事業を開始し、成功してきた。1950年代半ば頃の企業名にヘンメルレは刺繍輸出商社という意味でStickerei Exportという語句を付した所以である。しかし、ラウテラハにアウトマーテンのシフリ刺繍機械を装備する工場を購入し、刺繍生産にも参入した (Eugen Ruß Verlag 1954: 263)。Verlag Eugen Ruß (1972: 142) によれば、1913年に現在地に居宅兼工場建物を建設したが、第1次世界大戦後のインフレで資産を失ったも同然となった。

⑬ ヨーゼフ・フェンカルト (Josef Fenkart, Hohenems)

1885年に手動刺繍機械を使って生産を始めた。1886年に県庁 (Bezirkshauptmannschaft) から営業証を交付された。1907年まで手動刺繍機械を2台用いて生産した。この年にパントグラフ2台を購入した。息子のアロイス (Alois) がブラウエンで修業した後に、アルタハ (Altagh) の刺繍企業モレル社 (Morell & Co.) で刺繍職人マイスター (Stickermeister) として働くようになった。もう1人の息子アルフレート (Alfred) はフェルガーになり、ザンクトガレンの輸出商のために働いた。スイスのトゥールガウ、ホルン (Horn) の刺繍企業ビュヒラー社 (Büchler & Co.) の商品見本集 (カタログ) と設備を入手し、高性能のア

ウトマーテンのおかげで1921年に自社独自の輸出をまずベルギーとフランスに向けてできるようになった。インドのボンベイに支店を置いたこともあるが、ポンドの下落のために長続きしなかった。1930年代半ばに刺繍の仕事が不況となり、ニット生産に転換した。第2次世界大戦中も大戦後もこの仕事が繁栄し、ユーベレ (Jubele) という同社の商標がオーストリア中に知られるようになった。1946年に刺繍生産を再開した。生産品目のレース製ハンカチ (Spitzentaschentücher) が好評を博した。従業員数は約200名に上った。刺繍機械を20台所有していたが、そのほかに外部の刺繍機械もあると記されている。ローンシュティッカーに委託しているという意味である (Eugen Ruß Verlag 1954: 271-272)。

⑭ ヘルマン・ベシユ 合資会社 (Hermann Bösch K.G., Lustenau)

1893年に創業し、刺繍、ボビンレース、編み物 (Flechtwaren)、レース飾り房飾り (Posamenten) を生産していた (Eugen Ruß Verlag 1954: 298-299)。Verlag Eugen Ruß (1972: 138) によると、1945年以来ルステナウで繊維製品の小売卸売を営んできたが1954年に刺繍生産に再参入した。生産拡大のゆえに商業部門は閉じ、5台のシフリ刺繍機械を購入し、ほかに2台の機械をレンタルして生産した。1967年にドルンビルンのメードレ (Mähdle) 地区の土地を購入し、そこに工場を建てた。11台のシフリ刺繍機械とその他の刺繍関連の機械を設置した。内職刺繍職人 (Heimsticker) も多数雇用し、輸出先は40か国強に上った。フォルアルベルク刺繍工業連合の副会長で、ルステナウでの刺繍センター (Stickereizentrum) 設立に貢献した。1970年

代初め当時の社長ヴィリ・ベシユ (Willy Bösch) はフィンランドの名誉領事を務めていた。

⑮ ヘンメルレ・フォーゲル合名会社 (Hämmerle und Vogel KG, Lustenau)

19世紀から20世紀への転換期頃に、アントン・ヘンメルレ (Anton Hämmerle) が手動刺繍機械を購入して創業し、1928年にアウトマーテンシフリ刺繍機械を導入した。1936年に息子のアルベルト (Albert) が継承した。この頃、刺繍生産は不況に陥っており、ルステナウでは多くの刺繍機械が棄却されたが、アルベルトはその勤勉さによってなんとかもちこたえた。第2次世界大戦後、経営はハインツ・ヘンメルレ (Heinz Hämmerle) が引き継ぎ、刺繍生産は好景気が続いた。イタリア製のアウトマーテンシフリ刺繍機械を導入して増産したが、1957年に不況に陥った。しかし1958年に輸出を再開し、生産と経営は軌道に乗った。従業員を増やすだけでなくローンシュティッカーへの委託生産も増やした。1970年代初め時点で全世界に販売市場を広げ、50の代理店を擁するようになった。250名の従業員 (ローンシュティッカーを含むと考えられる) で約1千トンの高価な刺繍製品を生産し、100% 輸出した (Verlag Eugen Ruß 1972: 141)。

以上、主として1950年代半ば頃に有力となっていた刺繍生産企業の概要を紹介したが、そこからほとんどが1920年代頃までに創業していた企業であり、ルステナウに多かったことが明らかである。また、企業名からすると法人化していない企業が多かったし、兄弟がパートナーを組んで創業したり、後にパートナー化したりし

た場合もある。刺繍生産に特化していたとは限らない。各社の記述を読むと、ダニエル・メツツラーの遺産社を除いて刺繍とレースとが明確に区別されているが、その両方を生産する企業が少なくなかった。こうした実態が、刺繍とレースとの区別が曖昧になる要因の1つになったと考えられる。さらに、メリヤスなど他の種類の繊維製品も生産する刺繍工業企業があった。

3.7. フォラールベルク製刺繍の輸出先とその変化

ルステナウで生まれ育ち、インスブルック大学の地理学教室で博士学位と教授資格を取得した後にハイデルベルク大学の正教授となったモイスブルガーは、フォラールベルク刺繍団体(Vorarlberger Stickereiverbandとモイスブルガーは記しているが、フォラールベルク刺繍工業連合のことである)の内部資料や1971年のフォラールベルク輸出統計に基いて、フォラールベルクからの刺繍輸出金額の1950年から1970年までの変化を棒グラフで描いている(Meusburger 1972: 127)。このグラフから1960年代半ば頃から1970年まで輸出額が急増したことが分かる。さらにモイスブルガーは輸出の変化を大陸ないしこれに準ずる地理的範囲別に地図表現している。その文献は日本国内ではあまり知られていない学術雑誌に掲載されたものでありながら貴重な記録でもあるので、ここにそのコピーを掲載する(図6)。

モイスブルガーは、各地理的大空間別に、どの国がどのような理由で輸出先として重要になっているのか、逆に市場開拓が困難なのか、さらには中継貿易国となっているのかといったことを比較的詳しく述べている(Meusburger 1972: 127-134)。その情報源が何なのかを丁寧に

記していないという問題はあるが、推測するに刺繍工業連合での聴き取りによるのであろう。そのすべてを紹介することは紙数の制約があるので差し控え、図6から読み取れること、そしてそれに関連してモイスブルガーが述べていることを紹介する。

この図から1950年代後半以降の最大の輸出先はEEC諸国であり、これにEFTA諸国が続いていたことが分かるし、1962年からの輸出の伸びがEEC諸国向けで特に著しかったことも分かる。ただし、資本主義先進国全体で景気後退が明確になった1967年にEEC諸国への輸出は大きく落ち込んだ。北米向けは1953年に伸びたが、その後減少し、1960年代前半期に再び若干伸びたがその後は再度減少傾向となった。これに比べれば南米向け輸出が1950年代後半に比較的順調に伸びた。しかし1960年代には停滞した。輸出の伸びが顕著なのはむしろ東・東南アジア諸国とアフリカ諸国である。それらへの輸出増加が顕著になった年次は異なるが、1960年代後半以降になると両アメリカ大陸やオーストラリアへの輸出よりも東・東南アジアやアフリカへの輸出金額がまさるようになっていた。オリエント諸国への輸出の伸びも東・東南アジアやアフリカへの輸出と類似した動きを見せたが、その金額規模は小さかった。ソ連東欧への輸出はネグリジブルだった。Meusburger (1972: 129, 134)によれば、アメリカとオーストラリアへの輸出が落ち込んだのは、それぞれで刺繍・レース生産が伸びたからである。

図6からは分からないが、欧州諸国の中で最大の輸出先は西ドイツとなり、これにイギリスが続いた。EEC諸国の中でフランスのリヨンとイタリアのガララーテ(Gallarate)が有力な刺繍産地であるためにその両国への輸出は少ない

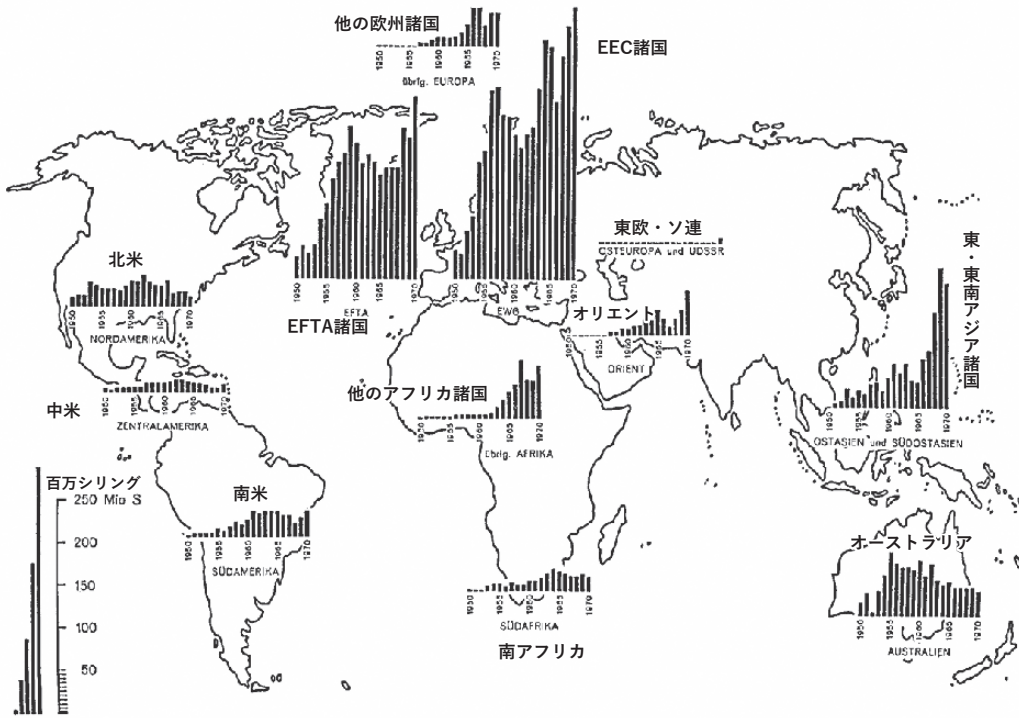


図6 フォアールベルク製刺繍輸出の仕向け地別に見た変化 1950～1970年

出所：Meusburger (1972: 130)。

注：原資料は Vorarlberger Stickereiverband 提供になる内部資料、及び論文全体で示した統計数値については特に断りのない限り Vorarlberger Exportstatistik (1971年秋時点まで未公表の1970年に関する統計) を利用したと Meusburger (1972: 125) の脚注1に記されている。EECとEFTAが結成される以前のデータについては、それぞれの加盟国のデータに基づいて集計したことが原図掲載ページで注記されている。オーストラリアにはニュージーランドを含むと推定される。

(Meusburger 1972: 127)。東・東南アジアの中では1960年代後半に日本への輸出が大きく伸び、タイ、シンガポール、香港とならんで主要輸出先の一つになった。言うまでもなくシンガポールと香港は中継貿易の拠点であり、シンガポールからの最終仕向け地はインドネシア、ビルマ、マレーシアなどだった。香港からはフィリピンへ、バンコクからはカンボジア、ビルマ、インドが最終仕向け地となった (Meusburger 1972: 131)。アフリカではかつて南アフリカが主要輸出先だったが、ガーナとナイジェリアが大きく伸び、この3か国がアフリカにおける主要輸出

先となった。またダホメ (Dahomey) 即ち現在のベナン (Bénin) がそれらに続いて重要な輸出先となっていた。ナイジェリアとガーナへの輸出が伸びたのは、オーストリアからの輸出使節団の営業活動が奏功したからである (Meusburger 1972: 131-132)。総じてアジア・アフリカ諸国への輸出はそれぞれ独自の関税障壁の設定や輸入禁止措置などによってフォアールベルクからの輸出が困難になることがあった。しかし、アフリカ諸国へは色彩鮮やかな衣装が好まれ、これにフォアールベルクの刺繍企業が対応して供給し、その商品を身にまとうことが

その人の prestige を表現することになることもあって、将来有望な輸出市場になるとフォラールベルクの刺繍工業関係者は見ていた (Meusburger 1972: 133)。

1970年時点でフォラールベルクの刺繍製品輸出量はスイスを凌駕したが、スイス製の方が高品質で高い単価のために輸出金額ではフォラールベルクが若干少なかった (Meusburger 1972: 126)。しかしともあれ、かつて東スイスの輸出商やファブリカントの単なる下請けだったフォラールベルクの刺繍・レース工業がここまで躍進できたのは、企業家たちが短期的に変化するモードに敏速に対応し、スタイリスト、既製服製造業者、オートクチュール業者、国際的百貨店などと密接に協力し、販売市場として有望な国々を頻繁に訪問して営業活動に努めたからであるとモイスブルガーは解釈している (Meusburger 1972: 126)。

そうした世界各国へのフォラールベルクからの刺繍製品輸出が成功するか否かは、先進諸国の場合モードの変化への対応によって左右されるが、途上国の場合、その貿易政策によって左右されるのであり、その国の経済水準や経済力の高低とはあまり関係がなく、むしろ奢侈品としての刺繍製品を身にまとうことが prestige を意味するという価値観の有無と関係している、と Meusburger (1972: 135) は述べている。これは、本稿に続いて執筆を予定している1970年代半ば以降のナイジェリアへの爆発的輸出増加の理由を見通していたことになり、卓見である。

ちなみに Winsauer (1967: 20) は、刺繍を完成するための手作業仕事に倦むことのない勤勉さをもって従事し、新しいことに対して開放的な態度を取るというフォラールベルクの人々の昔からの伝統が、国際的な競争市場でフォラール

ベルクの刺繍が評価され、高い地位を維持するのに貢献していると1960年代後半に記している。この解釈よりも、モイスブルガーの解釈の方が的を射ていると筆者は考える。ただし、オーストリアの国民文化ではなく、アルルベルク山塊以東でドイツ語のバイエルン方言を話すオーストリアの大部分の地域の文化とは異なるフォラールベルクの独自文化を重視するヴィンザウアの指摘も重要である。フォラールベルクではスイスやドイツのシュヴァーベン地方あるいはバーデン地方と同じくアレマン方言が話されているのである。とはいえ、筆者が現地で何回か聞いた限りにおいて、フォラールベルクでは谷ごとに異なる方言を話すので、フォラールベルク人どうしても他者の話す言葉を理解しづらいことがあるという。

そのことはともかくとして、モイスブルガーが指摘したように、国民文化あるいは国民の中の上階層の文化とでも言うべき価値観を見出すことが市場開拓を効果的に進めていくうえで重要であり、そのためにフォラールベルクのファブリカントや輸出商は、頻繁に世界各地を旅して回っていることを、モイスブルガーは企業への聴き取りを踏まえて次のように述べている。

「刺繍製品をどのような目的のために用いるのかといったことや、ある国のモードの特徴をよりよく知れば、それだけその要求にマッチした見本を提示することができる。例えば25人の従業員を雇用するルステナウのある刺繍製品輸出企業の支配人は、1970年の1年間で大阪、京都、神戸、香港、シンガポール、ジャカルタ、クアラルンプール、ボンベイ、バイルート、アクラ、アビジャン (Abidjan)¹⁷⁾、ダカル、ポルトノヴォ (ダホメ)、ナイロビ、ブラワヨ (Bulawajo)¹⁸⁾、ヨハネスブルク、ケープタウン、ブリュッセル、ロンドン、パリ、ミラノ、ケル

ン、ミュンヘン、モントリオール、ロサンジェルス、ニューヨークを訪れた。しかもその中には数回訪問した都市もある。これは決して極端な例ではない。ほとんどすべての刺繍製品輸出企業は同じような規模で最も重要な顧客との人的コンタクトを心がけざるを得ないのである。例えば、バンコクには1週間のうちにルステナウの刺繍製品輸出企業20社が、それぞれ独自に3ないし4つの顧客に見本をもって訪問したほどである。ルステナウは人口約1万5千人でしかないが、フォラルベルクの刺繍工業の中心と呼ばれているゲマインデである。目下のところ活動的な輸出企業は毎年約20万シリングを上のような旅行にあてていると思われる。いくつかのトップ企業は1年間で50万シリングを旅費に支出している。(Meusburger 1972: 135)

1970年代初め時点で、ルステナウに立地する約115の企業（そのうち80社が工業企業、35社が輸出業者）が相互に競争して、つまりそれぞれ独自に販売できる地域を獲得しようと努めていたとのことである (Meusburger 1972: 135)。その80社の工業企業の従業員数でみた規模別の数は、1～10人規模が26社、11～50人規模が39社、51～100人規模が9社、101～200人規模が6社だった (S.137)。こうした中小企業が、輸出市場を独自に開拓すべく相互に競争している状態だったのである。いずれも中小企業なので、大きな販売部門や市場調査部門を持っているわけではない。最新のモードに適合する見本を携えて、優良な代理店網をもち、顧客と直接接触するための旅行を頻繁に行うことが、刺繍企業が成功するための必要条件である。小規模企業であっても20名の要員を抱える代理店をもち、少なくとも5ないし6の大きな市場といくつかの小さな市場とに販売することが、個々の市場の販売変動に耐えるために必要なことである (S.137-138)。その具体的事例としてホーエネム

スに立地するヘルマン・フェント合資会社 (Hermann Fend KG) をモイスブルガーは紹介している。この企業については前項の3番目で筆者は紹介した。この企業は従業員数が約130名でフォラルベルクの中で最大規模の刺繍・レース生産企業の1つであり、1970年で、ウィーン、ミュンヘン、ドルトムント、シュトゥットガルト、チューリヒ、ヘルシンキ、オスロ、リヨン、モデナ、ロンドン、マンチェスター、バルセロナ、アテネ、リスボン、大阪、東京、名古屋、香港、ケープタウン、ヨハネスブルク、プンタアレナス (Punta Arenas)¹⁹⁾、シドニー、ニューヨーク、ロサンジェルス、テルアビブ、バイロート、コペンハーゲンに常設代理店を確保している、とモイスブルガーは記している。

1971年にはルステナウに刺繍センターが開設された。今後も刺繍製品の生産と輸出が発展するためにはさらなる品質向上を図るべく、世界トップレベルのスタイリストやモード創造者との協力と、刺繍従事者や営業マンへの継続教育が必要であり、センターがそのための地域的・組織的な前提条件である、という言葉でモイスブルガーはその論文を締めくくっている (S.139)。

4. おわりに

本稿によってフォラルベルクの刺繍工業は全体としてみるならば、20世紀初めまでスイスの輸出商やファブリカントの下請として機能していたことが明らかとなった。ただし、そこから脱却して自ら販売市場を開拓した企業が19世紀末から現れ始めたことは山本 (2015) で明らかにしたとおりであり、その流れが本格化したのは第1次世界大戦終了後数年たってからのこ

とである。1920年時点での刺繍輸出先のうちスイス向けが輸出総重量の91%を占めていたという事実は、この時点でもなお東スイスの輸出商やファブリカントへの依存度が極めて高かったことを示す。しかし、1928年にはスイスとの再輸出加工貿易の比重が総輸出重量の50%強になるほどに低下した。輸出市場として重要になったのはイギリスと欧州諸国の植民地だったが、アメリカや東アジアにも輸出市場を開拓した。

1929年の大恐慌はフォラルベルクの刺繍生産に大きな打撃を与え、1930年代を通じてその輸出は低下し続けた。それゆえ、代表的なファブリカントの中には他の繊維製品の生産に転換する者が現れたし、刺繍生産から撤退したファブリカントやローンシュティッカーが少なくなかった。これは州内に設置されている刺繍機械台数の減少によって明らかである。第2次世界大戦が勃発してもフォラルベルクの刺繍生産は継続した。ただし戦争末期の1944・45年に生産が継続したかどうかは不明である。ナチスドイツにオーストリアが併合されたことは、それまでのドイツへの輸出が国内他地域への移出に転換したことになったので、これが1938年から数年間の生産増加につながった。

第2次世界大戦終了後、フランス軍による占領政策とマーシャルプランとによってフォラルベルクの刺繍生産は比較的早く復興した。残存していた刺繍機械を1948年以降にフル稼働するほどとなり、1950年代半ばから1970年まで、停滞や減少する時期が若干あったものの、ほぼ順調に生産と輸出が拡大した。その輸出市場は全世界に広がった。この時期の最重要市場はEEC諸国やEFTA諸国などから構成される西欧だった。日本を含む東・東南アジア、ガーナ、ナイジェリア、ベナンなどの西アフリカ諸国へ

の輸出が1960年代後半以降増加したことも注目される。これらに比べれば両アメリカ大陸やオーストラリアへの輸出は停滞した。

上に見たフォラルベルクの刺繍工業の20世紀初めから1970年代初めまでの発展は、ファブリカントや輸出業者による外国市場に配置した代理店を直接頻繁に訪問して、それぞれの市場での好まれるデザインや色合いなどを見出そうとする営業努力と、東スイスの製品と質的に劣らない製品生産技術の高度化によっている。ファブリカントや輸出業者はそれぞれ相互に競争相手であり、独自に輸出市場を開拓した。これらが刺繍製品の生産販売に特化していたとは限らない。レースや他の繊維製品生産も行なう刺繍ファブリカントがあった。

フォラルベルク内での生産の多くをローンシュティッカーが担うという構造も重要である。個々のローンシュティッカーが特定のファブリカントあるいは輸出業者に従属する下請だったのか、それとも取引相手を臨機応変に変えたのかは明らかではない。確かなことは、ローンシュティッカーも含めて輸出市場が拡大した時期には3交代制で1週間7日間操業したが、輸出が減少する不況期になれば刺繍機械の稼働時間を制限したり、休機措置が取られたりしたということである。その場合であってもローンシュティッカーの収入が激減しないように連邦法である「刺繍支援法」に基づいてローンシュティッカーが受け取る賃金の最低金額が保障されたり、休機の場合の補償金が刺繍企業・従業員・ローンシュティッカーが拠出した基金から支払われたりした。ファブリカントもローンシュティッカーも州内の中で過半数がルステナウに集中立地していた。しかしこの両者はその近隣のホーエネムスとアルタハにも多く、精製工程を担当

した繊維大企業がドルンビルン立地であることも含めて、ライントール中央部全体が生産と流通の中心だったとみるのが妥当である。

付記：本稿は日本学術振興会科学研究費挑戦的萌芽研究「中欧諸国の多様な連邦制の下での周辺的位置にある地域の経済発展に関する比較研究」(2015～2017年度 課題番号15K12952)及び同振興会科学研究費基盤研究(C)(一般)「エコ社会的市場経済原則の下での「場所に関する戦略的経営」の経済地理学的研究」(2019～2024年度 課題番号19K01191)の助成を得て実施した研究による成果の一部である。

注

1) 山本(2025)の標題と本文中に刺繡織という表現を用いたが、これは不適切な表現だったので訂正したい。織物とは経糸と緯糸を交差させて生産する布地のことを意味するが、刺繡はそのような技術で生産するものではないからである。岩波書店の『広辞苑』第二版補訂版によれば、「刺」は針で縫うこと、「繡」は衣に文様を施すことを意味する。したがって刺繡とは一般に台となる布地に糸を針で縫い付けてなんらかの文様を描き出すこと、及びこの技法による製品を意味すると一般に受け取られている。これに対してレースとは三省堂の『大辞林』によれば「網目状の模様を編み出す技法。またその製品」のことである。ドイツ語のStickerei(シュティッケライ)は本来刺繡を意味するのに対して、網目状の模様を呈する布を意味するドイツ語はSpitze(シュピッツェ)であって、この2つは異なる。このことはKammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg(1952: 180)で解説され、異なる業種として扱われていることを山本(2025: 32-33)に記した注6)で述べた。その解説に大きな問題はないが、少なくともEugen Ruß Verlag(1954)で紹介されているStickereiを生産している企業の製品の写真をみると、刺繡というよりもレースと呼ぶにふさわしい製品がいく

つか掲載されている。それゆえStickereiとSpitzeとの区別が曖昧になり、レースであってもシュティッケライとフォールベルクで表現されるように1950年代にはなっていたと推定できる。筆者がStickereiを生産している企業を2023年9月に訪問してその商品を観察したり、たまたま街中や工場建物に飾られていた宣伝用の大きな幕に記されている用語を垣間見たりしたところ、フォールベルクで生産されているStickereiの中で重要な商品はアフリカ市場向けという意味でアフリカンレース(African Lace)と表現されていた。ちなみにLangenscheidts Taschenwörterbuch Englisch(Englisch-Deutsch Deutsch-Englisch)によればSpitzeはlaceと、Stickereiはembroideryと英訳される。

- 2) 2種類の機械の生産性についてはWeitensfelder(1999: 85)による。
- 3) Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg(1952: 200)によれば、平繡刺繡(Plattstichstickerei)はFeinstickerei(精細刺繡)ともよばれ、最初は手作業で、ついで手動刺繡機械で、そしてシフヒェン刺繡機械を用いて生産されるようになったのに対して、Grobstickerei(粗刺繡)は鎖編刺繡(Kettenstichstickerei)ともよばれ、最初は手作業で、ついでCornély-maschineを用いて生産されるようになった。この機械はミシンの一種である。
- 4) Linder(1956: 27とその付図1枚)には鎖編刺繡機械を、Linder(1956: 31-32とその付図2枚)には手動刺繡機械及びシフリ刺繡機械を設置している場所が表と地図で提示されている。このデータに基づいて、より鮮明な地図で井出(1970: 30, 29)や竹内(1974: 69)が表現したのである。ちなみにLinderの経歴については不明だが、論文の表紙に記載されたDipl.-Vw Fritz Linderという氏名の後にLustenau, Vorarlbergという文字が括弧書きで記されているので、フォールベルク州ルステナウに住んでいたと考えられる。この人物はすでに国民経済学のディプロームを取得していたので、学位論文の提出先であり論文指導教員でもあったフェルディナント・ウルマー教授(Prof. DDr. Ferdinand Ulmer)の助手を務めていたか、あるいはルステ

ナウで刺繍・レース工業関係の仕事に就いていたと思われる。ウルマーは1945年7月にフォラルベルク州庁に入庁し、翌年に同州統計局長となり、1949年に同州議会議員かつ州政府閣僚となり、1952年までその地位に就いていた。インスブルック大学教授となったのは1952年であり、1954年にその正教授に昇格した (<https://vorarlberg.at/web/landtag/-/ulmer-ferdinand-dr-rer-pol-et-dr-jur> 2025年12月5日閲覧)。フォラルベルク州政府経済部門統計課 (Landeswirtschaftsamt Abteilung Statistik) は最初の『経済社会統計書 (Vorarlberger Wirtschafts- und Sozialstatistik 1. Jahrgang)』を1945年10月から半月に1回の頻度で刊行し始めたので、その編纂の任にウルマーは就いていたと考えられる。その現物の第1号 Folge 1 vom 1.10.1945. を筆者は州立図書館で閲覧した。そのS.1の冒頭に、Nur für den Dienstgebrauch herausgegeben vom Landeswirtschaftsamt - Abteilung Statistik と記されている。このウルマーの指導による博士論文であり、『フォラルベルク州経済社会統計書』に記載された同州の刺繍・レース工業の実態を表わす統計表をフリッツ・リンダーは利用しているし、他の統計表などの典拠も克明に記述している。情報源を丁寧に記述しているわけではない場合もあるが、刺繍・レース工業関係者からの聴き取りを踏まえていることが分かる内容であり、その記述のほとんどを信頼できる。残念ながら筆者は、上記の統計書を閲覧した際に刺繍産業に関する歴史的統計データを掲載する号があったことに気づいていなかった。

- 5) ヴィンザウアについては山本 (2025: 5) を参照されたい。
- 6) Der große Aufschwung durch die Schifflemaschine (シフリ機械による大躍進) というタイトルの文章であり、その著者名は記されていない。またこの冊子にはページ番号が付されていない。そこで表紙を1頁目としてページ番号を割り当てた。12社の名称は次の通りである。Richard Hämmerle, Brüder Fitz, Ignaz König, Ferdinand Scheffknecht, Hermann Bösch, Franz Wehrle, A. Scheffknecht, J.G. Seewald, Julien Daltroff, Gottfried Hofer,

Schmalzigaug, Fenkart。デザイナーの名前はヨハン・ペータールンガー (Johann Peterlunger) である。

- 7) フォラルベルク州首相を1918年から1930年まで務め、その後オーストリア首相も務め、さらに再度1931年から1934年まで州首相を務めたオットー・エンダー (Otto Ender) の伝記 (Huebmer 1957: 95-102) にもそのことが記されている。エンダーは、ルステナウの南西に位置してアルペンライン川を挟んでスイスのカントン・ザンクトガレンと国境を接して刺繍生産が盛んなアルタハ村で生まれ育った人物であり、父親がフェルガーだったことは山本 (2025: 14) で Winsauer (1965: 13) に依拠して述べておいたが、Huebmer (1957: 95) もこのことを述べている。
- 8) Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 196) にも、第2次世界大戦でドイツが敗北した時にフォラルベルクの刺繍工業も潰えたし、その再興は不可能であると考えられた、と記されている。ただし敗戦後1年ほどしてから、国内需要向けにわずかではあるが生産が再開され始めたということも記されている。
- 9) 現在の刺繍生産輸出団体である「刺繍経済 (Stickereiwirtschaft)」の事務局長を長年務めているフォラルベルク経済会議所工業部職員のアンドレアス・シュタウダハは、1946年に刺繍危機基金が暫定的に復活したことを述べており、いくつかの地元で刊行された参考文献も提示している (Staudacher 2019)。
- 10) Meusburger (1972: 138) によれば、刺繍レース工業は景気変動にさらされ、ひどい場合にはほとんど注文が入らなくなり、それ故その仕事を辞めて別の職業に転じたり、刺繍機械を売却したり、スクラップ化したりせざるを得ないという歴史を繰り返した。1930年から1933年の間に200台ものアウトマーテンシフリ刺繍機械が棄却されたときモイスブルガーは Brüstle (1965: 72) に依拠して述べている。そうなった場合の苦境を和らげるために「刺繍危機基金法 (Stickereikrisenfondgesetz)」が1933年に制定され、1940年まで有効だったとのことである。これによって刺繍機械を稼働する時間に関する規制、ローンシュティッカーの最低賃加工代

金が決められたという。さらに受注がなく稼働できなくなった刺繍機械を所有する企業には支援措置が取られたという。Staudacher (2019) も上記の法律が1933年に制定されたと述べている。モイスブルガーは刺繍産業の中心地ルステナウで生まれ育ち、インスブルック大学で学位と教授資格を取得し、ハイデルベルク大学地理学研究所の正教授となった人であり、ドイツ語圏地理学界において名声を博した。筆者のフォアラールベルク経済研究への導きをモイスブルガー教授がしてくださった。なお、山本 (2025: 29) で述べたように、Winsauer (1965: 17) は「刺繍危機基金法」が1932年に制定されたと記している。同じ個所でヴィンザウアは「刺繍支援法」についても言及している。

- 11) 刺繍支援法は次のオーストリア連邦広報に掲載されている。Bundesgesetzblatt für die Republik Österreich Jahrgang 1956 Ausgegeben am 26. November 1956. この広報の Nr.22でその原文 "Bundesgesetz vom 7. November 1956, mit dem Maßnahmen zur Förderung der Maschinenstickerei im Lande Vorarlberg getroffen werden (Stickereiförderungsgesetz)" を閲覧できる。 https://www.ris.bka.gv.at/Dokumente/BgblPdf/1956_222_0/1956_222_0.pdf 2025年12月21日取得。
- 12) 1962年の「改定刺繍支援法」(Stickereiförderungsgesetz-Novelle 1962) については Winsauer (1965: 54) も言及している。この改定法は次のウェブサイトを確認できる。 Bundesgesetzblatt für die Republik Österreich Jahrgang 1962 Ausgegeben am 6. März 1962 (https://ris.bka.gv.at/Dokumente/BgblPdf/1962_62_0/1962_62_0.pdf 2025年12月23日取得)。この法律はさらに1985年に改定され、2000年に廃止されたことが次の website に記されている。 <https://www.ris.bka.gv.at/eli/bgbl/i/2000/116/P1/NOR40012551?Abfrage=Gesamtabfrage> 2025年12月23日閲覧。1956年の法律と1962年に改定された法律を読んでみたところ、本文に記したモイスブルガーによる具体的な補償金の支払い等に関する細かい運用規程まで記されていなかった。これは法律の下での連邦政府か州政府、あるいは管理委員会が制定したであろう運用規程か、または刺繍

工業連合事務局ないし刺繍ファブリカントでの聴き取りに基づくものと思われる。

- 13) この2つの要因については、Feurstein (2009: 46)、モイスブルガー教授との会話の中での筆者への教示、及び Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 141-144) などに基づいて山本 (2024: 120, 429) で記したことがある。
- 14) Hollenstein (2013: 33) は Stickereifabriken、Produzenten ohne Maschinen、gewerblichen Sticker と表現しており、その順番にファブリカント、輸出商、ローンシュティッカーと解釈した。
- 15) 原文では Stickerei (刺繍) の種類としてこれらの用語が記されていたが、Google の検索エンジンを2025年12月29日に利用してこれらの用語を調べたところ、レース (Spitze) を意味する修飾語としてそれらの画像や和訳語がヒットした。
- 16) 彼の政治経歴についてはフォアラールベルク州議会のホームページで確認した <https://vorarlberg.at/web/landtag/-/haemmerle-adolf> 2025年12月23日閲覧。
- 17) コートジボワールの都市。
- 18) ジンバブエの都市。
- 19) 南米チリの都市。

文 献

- 井出策夫 (1970) 「オーストリアの工業—Vorarlberg 州の繊維工業を中心として—」、『学芸地理』(東京学芸大学地理学会) 第24号、pp.17-34。
- 黒澤隆文 (2002) 『近代スイス経済の形成—地域主権と高ライン地域の産業革命—』京都大学学術出版会。
- 竹内淳彦 (1974) 「ヨーロッパにおける農村型地場産業—Vorarlberg 州 (Austria) の繊維工業を中心として—」、『日本工業大学研究報告』 第4巻、pp.63-76。
- 山本健兒 (2024) 『「隠れたチャンピオン」を輩出する地域—欧州における小規模農村の地域の事例—』古今書院。
- 山本健兒 (2025) 「オーストリアのフォアラールベルクにおける刺繍織・レース工業の発展—その起源と

- 産業化時代に焦点を当てて一」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第92巻第1号、pp.1-40。
- Brüstle, Ferdinand (1965) *Die Entstehung und Entwicklung der Vorarlberger Stickerei*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt. (筆者未見)
- Eugen Ruß Verlag (Hrsg.) (1954) *Wirtschaftsgeschichte Vorarlbergs*. Bregenz: Vorarlberger Graphische Anstalt, Eugen Ruß & Co.
- Feurstein, Christian (2009) *Wirtschaftsgeschichte Vorarlbergs von 1870 bis zur Jahrhundertswende*. Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft mbH.
- Heinzle, Oliver (2018) Über die Anfänge der Stickereigeschichte in Lustenau. In: *Neujahrsblätter des Historischen Archivs der Marktgemeinde Lustenau*, 7./8. Jahrgang, S.32-78.
- Hessenberger, Edith (2016) *SpitzenZeit. Vorarlberger Erinnerungen zum Stickerelexport nach Nigeria*. (Vorarlberg Museum Schriften 20), Innsbruck: Studienverlag Ges.m.b.H.
- Hollenstein, Sabine (2001) Die Marktgemeinde Lustenau im Strukturwandel : von der ehemaligen Stickereimetropole zum modernen Wirtschaftsstandort: Ursachen, Entwicklungen und Auswirkungen auf den Stellenwert der Stickereibranche in der Bevölkerung. Diplomarbeit der Erlangung des Magistergrades der Philosophie an der Human- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Universität Wien.
- Huebner, Hans (1957) *Doktor Otto Ender*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt Ges.m.b.H.
- Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952) *100 Jahre Handelskammer und gewerbliche Wirtschaft in Vorarlberg*. Feldkirch: Verlag Franz Unterberger. この書籍のS.107以降が Struktur und Bedeutung der gewerblichen Wirtschaft in Vorarlberg と題して、個々の産業部門ごとの1950年当時の現状とそれまでの歴史を、豊富な統計資料や地図とともに叙述している。そのなかで、繊維工業 Textilindustrie については S.156-201において、さらにその一部としての刺繍製造業 Stickerei については Die Stickereiindustrie – Eine Vorarlberger Spezialindustrie という標題のもとで S.184-201で叙述している。また、ボビンを用いるレース製造 (Die Klöppelspitzenerzeugung) について S.180-184で叙述している。
- Linder, Fritz (1956) Dissertation über “Der Export der Vorarlberger Stickereiindustrie”. Universität Innsbruck.
- Meusburger Peter (1972) Die Export der Vorarlberger Stickereiindustrie in den Jahren 1950-1970. In: *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*, Band 114/I/II, S.125-142.
- Mühlwerth, Walther (1941) *Probleme der Vorarlberger Stickereiindustrie : ein Beitrag zur Geschichte der Vorarlberger Industrie*. Dissertation der Universität Innsbruck. (筆者未見 ただしこれはインスブルック大学で認められた博士論文であり、その結論部分のみの同大学図書館によるデジタル化されたものを、次のウェブサイトで閲覧できる。 <https://ulb-digital.uibk.ac.at/download/pdf/9769505.pdf> 2025年12月24日取得)
- Mühlwerth, Walther (1950) Aus der Vorarlberger Stickereiindustrie. In: Brabec, Friedrich (Redakteur) (1950) *Vorarlberg und seine Wirtschaft* (Sonderdruck von Industrie-und Handelszeitung), Wien: Börsen-Kurier-Verlag, S.43.
- Saxer, A. (1931) Der Stickereiveredelungsverkehr mit dem Ausland. In: *Zeitschrift für schweizerische Statistik und Volkswirtschaft*, S.408-435. https://www.sgvs.ch/papers/sjesBackIssues/1931_PDF/1931-I-24.pdf
- Staudacher, Andreas (2019) 150 Jahre Stich um Stich. Der Beginn der industriellen Stickerei in Vorarlberg. In: *Thema Vorarlberg*, Ausgabe 51, S.22-23
- Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie (1968) 100 Jahre Vorarlberger Stickerei-Industrie: Lustenau 25. Mai - 6. Juni 1968. Lustenau: Buchdruckerei Lustenau.
- Verlag Eugen Ruß (Hrsg.) (1972) *Wirtschaftsgeschichte Vorarlbergs*. Bregenz: Verlag Eugen Ruß & Co.
- Weitsfelder Hubert (1999) *Industrie-Provinz. Vorarlberg in der Frühindustrialisierung. 1740 bis 1870*. Im Auftrag des Amtes der Vorarlberger Landesregierung. Wien und Dornbirn.

Winsauer, Franz (1965) *200 Jahre Vorarlberger Stickerei—eine Plauderei, den Stickereiabteilungen der Bundestextilschule Dornbirn zu 75 Jahrfeier ihres Bestandes gewidmet*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt.

Winsauer, Franz (1967) 100 Jahre Vorarlberger Stickereiindustrie. 次の雑誌のための Manuskript と考えられる。 *Jahresbericht / Bundestextilschule Dornbirn*, 1967/68, S. 18-27.

[九州大学名誉教授]

Development of Embroidery Industry in Vorarlberg, Austria — Focused on the Period between the Beginning of the 20th Century and the Beginning of the 1970s —

Kenji YAMAMOTO

The purpose of this paper as a sequel of Yamamoto (2025) is to describe the development of embroidery industry in Vorarlberg, Austria, focused on the period between the beginning of the 20th century and the beginning of the 1970s. In order to do this, I utilized Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952) and some papers by local researchers and well-informed people in Vorarlberg such as Linder (1956), Winsauer (1965), Meusburger (1972), Heinzle (2018), Staudacher (2019) and so on.

While most of *Lohnsticker* (contract embroiderers) in Vorarlberg were still dependent on *Fabrikanten* (factory-owning manufacturers) in eastern Switzerland, centered on St. Gallen, until the beginning of the 1920s, some *Fabrikanten* in Vorarlberg were independent from them and had already exported embroidery since the beginning of the 20th century at latest. The movement of their independence from eastern Switzerland proceeded in the 1920s and new markets were developed in the United Kingdom and some colonies of the Western countries in Asia and Africa. Because of the Great Depression, the export of embroidery from Vorarlberg decreased in the 1930s. Some pioneering *Fabrikanten* of embroidery changed their machines and products, and many *Lohnsticker* withdrew from manufacturing embroidery.

After World War II, some *Fabrikanten* and many *Lohnsticker* restarted their own business. The transaction between them functioned so well that the production volume and export increased as early as between the end of the 1940s and the mid 1950s as well as in the second half of the 1960s. They were concentrated in the mid-area of the Rhine Valley, centered on Lustenau more clearly than in the beginning of the 20th century. *Fabrikanten* and exporters in Vorarlberg were eager to develop new markets all over the world and got information about the sort of embroidery peculiar to each national and ethnic culture by means of direct visits of foreign countries, and they were successful in East and Southeast Asia and West Africa in the latter half of the 1960s on the basis of high quality of their own products, while the most important markets of embroidery made in Vorarlberg were EEC countries, followed by EFTA countries.

On the other hand, the Federal Law of Supporting Embroidery was enacted in 1956 and amended in 1962. Therefore, production of embroidery in Vorarlberg was to be controlled strictly. In the period of good business conditions, manufacturers of embroidery could produce 24 hours in a day and seven days in a week. If the business conditions became bad, they might work only from five o'clock in the early morning to one o'clock in the midnight. If an embroidery machine was forced to be unutilized because of bad business conditions, the manufacturers including *Lohnsticker* concerned could be compensated with money from the Crisis Foundation raised not by the federal and provincial governments, but by *Fabrikanten*, their employees and *Lohnsticker*.

(Professor Emeritus of Kyushu University)